

## 第1回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー 概要報告

大西 浩明

- ◇日時 2022年5月28日(土) 10:00~12:00  
◇場所 県立万葉文化館周辺  
◇参加者 【学生】東、大竹、福西、後川、田中、三宅、山下、飯田  
【現職教員】村上(平城小)  
【万葉文化館】竹内、井上、阪口  
【大学教員】加藤、及川、米田、大西 計16名

- ◇内容 明日香村内のフィールドワーク 「遺構の保存と活用について」  
飛鳥京跡苑池 → 飛鳥宮跡 → 川原寺跡

昨年に引き続き、竹内主任研究員に案内いただき、飛鳥京跡の保存と活用について、特に授業で扱う際のヒントも交えて説明していただいた。

### 1. 飛鳥京跡苑池

苑池は7世紀中ごろ、斉明天皇の時代に造営が始まり、のちの天武天皇の時代(7世紀後半以降)に大幅に改修されたと考えられている。当時の天皇の皇居・飛鳥宮跡の北西に隣接。南北約280メートル、東西約100メートルの範囲に、庭園の中心となる北池(南北約52メートル、東西約36メートル)と南池(南北約53メートル、東西約63メートル)、水路や建物などがあつたとみられる。



1916年に発見された石造物の模型

万葉集には、苑池で詠われたと思われるものはないが、同様に東アジアとの関わりで万葉集を捉えてみると発想が広がる。東アジアより伝わった漢字で表現された万葉集であることもそうだし、歌集を作るという発想自体が当時の日本にはなかった。



苑池休憩舎より苑池をのぞむ

20年にわたる発掘調査から、北池には水が湧き出ようになっていたことが分かり、あふれた水を飛鳥川へ流す水路も見つかった。南池が鑑賞や儀式に使われたのに対し、北池は流水施設という祈りの場であったと考えられる。この苑池と同じような構造をもつ庭園は日本国内にはなく、新羅とのつながりが強く感じられる。東アジアとの関わりという視点で授業展開を考えた方が、よりダイナミックな授業になるのではないか。



「採女の袖吹きかへす 明日香風  
都を遠み いたづらに吹く〈志貴皇子〉」

## 2. 飛鳥京跡



飛鳥宮跡にて

これまで「伝飛鳥板蓋宮跡」として史跡に指定されていたが、これまでの調査・研究によって、舒明天皇の飛鳥岡本宮、皇極天皇の飛鳥板蓋宮、齊明天皇・天智天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇・持統天皇の飛鳥浄御原宮が重層的に営まれた遺構が確認されており、2016年に史跡の追加指定とともに、「飛鳥宮跡」に名称変更された。

奈良県による基本構想では、遺構保存と景観保持を両立させつつ、飛鳥宮の最初の宮である飛鳥岡本宮造営1400年にあたる2030年には一部の建物を復元し、飛鳥京跡を活用する計画である。

## 3. 川原寺跡

東西の長さは150m以上（今までの発掘調査でわかっている限り）南北に330mというとてつもなく広い敷地の中に、東塔ひとつとふたつの金堂、境内側に扉を持たずに解放された僧房が北東西の三方から囲むという、一塔二金堂式（川原寺式とも称される非常に珍しい）伽藍を持つ寺。寺の前には、発掘により判明した遺構に、礎石のレプリカを置いている。乗ってみるとポコポコ音がした。

道を挟んだ橘寺と比較したとき、川原寺は南向きに建てられているのに対し、橘寺は西向きに建てられている。南向きは中国の影響を受けたと考えられるが、創建年代による建て方の違いなども授業として扱えば面白いかもしれない。



川原寺跡にて

### 【まとめ】

日本の建造物は、欧米の石造りとは違い木造のため、どうしても残らない。そのため遺構を発掘して、その上にあった建造物の様子のある程度思い描くことも致し方ない。ただ、これまで明日香の様々な石造物は「よく分からないもの」として扱われてきたが、この20年ほどの学術的な研究によって、「いつの時代の」「何の目的で」つくられたものかが分かりつつある。単なる「古代のロマン」として見るのではなく、科学的な見方で見ることにより授業展開の幅が広がるのではないかと思う。

※次回は7月16日（土）10時～ 万葉集に関する話題提供